

東北地方の二つの方言の韻律分析¹
—「アクセント核はどこから来たか」補説—
A Prosodic Analysis of Two Dialects of Tohoku Japanese
—Addenda to “Where do accent kernels come from?”—

児玉 望

KODAMA Nozomi

はじめに

日本語アクセント系統史を論じた児玉望(2017)において、筆者は、木部暢子(2008)で提案された、東北地方の外輪式方言は上げ核の昇り核化によって生じたとする説を支持し、上げ核体系であったピッチアクセント祖体系に、昇り核化と降り核(及び引き続いて下げ核)化という両立不能の二つの波状的变化が、日本列島本土の東と西で生じたとする仮説を展開した。本稿では、日本放送協会編『全国方言資料』第7巻辺地・離島編(I)に収録された、東北地方の2つの方言の談話音声資料の分析に基づき、これらの特異な体系の存在が、児玉(2017)の仮説によってうまく説明できることを論じる。

山形県旧朝日村大鳥方言は、核音節で上昇が開始される昇り核体系として分析される。このような体系は、東北地方に広がる核音節で上昇が完了する昇り核体系と、核の次音節で上昇が完了したと考えられる上げ核祖体系との中間に位置づけることができる。一方、岩手県旧種市町中野方言は、これまで現代方言アクセントの体系としては実在が確認されていなかった降り核体系をもつものであると主張する。仮説に従えば、先行して降り核化に向かう変化が起きたため、昇り核化の波が及ぶことなく孤立して降り核に留まった体系、あるいは、昇り核化の波が及ばないうちに上げ核から降り核化する変化が起きた体系ということになる。

いずれの体系も、東北方言に広がった母音*i*の中舌母音化を経ていないという保守的な特徴を共有する。アクセントに関しても、東北諸方言の先行段階を探る手がかりとして、より詳細な調査による本稿の仮説の検証が必要であると考ええる。

¹ 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 15K02484) の助成を受けたものである。

1 旧朝日村大鳥方言

『全国方言資料』第7巻冒頭には、柴田武氏による収録各方言の特徴についての概観（以降、柴田 1967 とする）が加えられており、この部分が柴田(1988:275-295)にも「日本の言語島（一）」と改題されて再録されている。

柴田(1967:18)のアクセントの概観は、類別語彙に従った、次のような簡単なものである。

（○をH、●をLに置き換える。）

(1) (U群は語末が狭い母音で終わるもの、A群は語末が広い母音で終わるもの)

第1類(「鼻と」) LLL

第2類(「橋と」), 第4・第5類U群(「箸と」, 「秋と」) HLL

第3類(「花と」), 第4・第5類A群(「肩と」, 「汗と」) LHL

第2類が第1類・第3類の両方と弁別を保っているとする点が目を惹くが、このことの系統史的解釈に関する明示的な言及はない。ただし、総説にいう、「古い言語の残存地という意味で」の「言語島」の例にあてはまると言えるのかもしれない。

しかし、(1)の解釈の根拠となったとみられる柴田(1953:439-441)では、この方言のアクセントのもつさまざまな異音的な実現形が記述されている。

(2) A/CVCV/ あめ,牛,口,竹,鳥,箱,筆,水,虫

B/CVCV/ 石,紙,川,梨,夏,橋,冬,町; 秋,帯,貝,鯉,さる,つる,箸,針,春,松,麦,夜

C/CV「CV/ 足,池,犬,馬,親,草,くつ,米; 雨,板,糸,かさ,肩,空,ねこ,舟

ほかにも、この方言の音素論的分析を試みるこの論文の語例の多くにアクセントの音素表記や音声表記が付されている。特筆される点は、A型の音声形がCV]CV, CVCV]²の下降位置の異なる異音的实现を持つ点である。このような下降位置の異なりは、3音節や4音節でも複数観察されており、このことが(2)の音韻解釈で上昇位置のみを弁別的とする解釈の根拠となっているとみられる。この解釈は、「上げ核」あるいは「昇り核」を最初に提唱した柴田(1955)の先駆をなすともみえる。

ただし、B型ではいつも「CV]CV、C型ではいつもCV「CV]であるとしている点を考慮すると、核として捉えるならば、単なる上げ核ではなく上野(1975)にいう(1音節卓立の)「アクセント高核」ということになるだろう。

しかし、上記の記述にはいくつかの疑問が残る。まず、A型の実現形CV]CVとB型の「CV]CVは共に下降があり「両者を混同して聞く恐れがある」としているが、その弁別に

² 原文の下降契機記号は"]]"ではなく、"]]"の上下反転形。

ついでの説明は不十分である。「A型は『高くなるところなし』、B型は『第一音節で高くなる』」(柴田 1953:439)という記述は、段階観的な、MLとHLの対立を思わせる表現となっている。第1音節で「高くなる」かどうかは、先行の文節がある場合の実現形で確かめられそうにも思えるが、このような連文節環境³の記述はない。

もう一つは、A型の、なくなったり位置が変わったりしうる下降と、B型・C型のいつも上昇の1音節後で生じる下降は、同じものなのか、という点である。もしも同じ下降であるとすると、下降の位置が可変的な型とそうでない型が対立することになる。しかし、外部の観察者は、言語調査者であれ母語として習得中の話者であれ、ある語で下降が可変的であることは知り得ても、ある語では可変的でない、ということを知ることができない。このような弁別体系は存在が難しいと思われる。従って、B型・C型でも下降位置が変わる可能性があるか、そうでなければ、位置が変わる下降とそうでない下降が単体でも聞き分け可能な異なる音声的实现をもつ、ということが予想される。

『全国方言資料』の10分程度の談話音声資料は、このような疑問点を確認するためにじゅうぶんに有用である。たとえば、柴田(1953:440)に言及されている、上昇のない3音節語の3つの下降位置は、この談話資料の中にすべて現れる。

- | | | | | |
|-----|----|---------------|-----|---------------------|
| (3) | a. | サガ]ナダッテ | p62 | 「魚だって」 ⁴ |
| | b. | サ]ガナ]カ[ネー]バ | p65 | 「魚を食べなければ」 |
| (4) | a. | コドモノ]ア[ダ]リダバ | p58 | 「こどものころなどは」 |
| | b. | コドモダ[ド[キ]ダガシ | p62 | 「こどもころのねえ」 |
| | c. | コ]ドモモ [コー]ナリニ | p63 | 「こどもも このように」 |

(3)aは、柴田(1953:440)でC類に助詞が接続した場合のCV「CV」CVと聞きあやまられやすいとされる音形であるが、冒頭2音節が高平調であることが特徴である。(3)bと(4)dの音節後に下降がある句頭音節は、「高くなるところ」に聞こえるが、*praat*を用いてピッチ形を分析すると、(3)aと同様に、句頭音節が高平調であることがわかる。「コドモ」と「サガナ」の2語の出現例は以上ですべてであり、同じ語については連文節構造の後続文節に出る音形は確かめられないが、他の頻出語彙で句頭音節のみが高い音形と連文節構造後続

³ 本稿では、2つ以上のアクセント単位が音韻句内に連続するものを「連文節構造」と呼ぶ。アクセント単位は通常文節を単位とするためであるが、「など」「ばかり」のように付属語がアクセントをもつ場合は、単一の文節が連文節構造をもつこともある。

⁴ 『全国方言資料』からの例文のカナ表記と解釈文は、原文をそのまま引用する。例文に追加された“[” (上昇契機)、“]” (下降契機)、“[[” (後続音節上昇調)、“]]” (先行音節下降調)のアクセント表記は筆者による。なお、カナ表記では、小文字「ア」が広母音の表記に用いられているが、この場合は長音を表記していない場合がある。

文節の両方に出現する語形の例からの類推は可能である。

そこで、本稿では『全国方言資料』の談話音声資料について、特に頻出語を中心に、どのようなピッチ実現形が現れるかを分析していく。着目するのは語頭音節のピッチ形である。以下では、語頭音節が高平調か、上昇調か、低平調かに応じて分類して記述し、さらにこれらがそれぞれ無核型、語頭核型、非語頭（語中・語末）核型と分析できることを示す。

1.1 語頭の高平調

語頭音節のピッチが高平調であり、下降の有無や位置が可変的である語形は、名詞・動詞を含めて多数みられる。ここでいう「高平調」は、語頭音節の Onset の子音ではピッチ上昇があるものも含むが、少なくとも閉鎖の解放時以降はピッチの有意味な上昇がみられないものを言う。Onset の子音が無声の場合はこの部分にそもそもピッチ曲線が現れない。

2 拍名詞第 1 類のコシ「腰」は以下の 3 つの出現例がある。

- (5) a. コ]シマガッタ[ヨー]ダ [ナー]] p76 「腰が曲がったようですね」
b. ワ[ガ]コシバイワネーデ p76 「自分の腰のことを言わないで」
c. オレ]コシマガッタニヤンテ p76 「俺の腰が曲がったなんて」

(5)a が句頭高平調を持ち下降のある語形、(5)b と(5)c が句頭ではなく「高くな」らない非句頭の形であるが、後者は連文節構造とみるか、複合語化しているかが判断できない。

イシャ「医者」でも、語頭の高いピッチ形と低平なピッチ形が現れる。

- (6) a. イシャサモ [イツ]タコト ([ネーン]ダケ) p64
「医者にも行ったこともありませんでしたよ」
b. (イ[マ]ダバ)[イ]シャモ p64 「いまならば医者も」
c. イシャモ [カゲ]ダリ p80 「医者にもみせたり」

(6)a と(6)b は、括弧内の音声重なっている。(6)b が高平調で下降のある形、(6)a と(6)c が句頭の上昇のない形である。(6)b の下降は、シャが下降調、モが低平調で、[イシャ]モとも聞こえる。

柴田(1967)で、第 1 音節の後でいつも下降があるとされる 2 音節名詞第 2 類の中にもこのような句頭高平調や下降の遅い音形が現れる語がある。ユギ「雪」とマチ/マジ「町」である。

- (7) a. ユギワ]フ[ル]ヒデ]フ[ル]ヒデ [ナ p67 「雪が降る日で降る日でね」
b. フッ]タ]ユギ [ワ]ズカ[シ[ゴ]スンダ]モンダハゲニ p69
「降った雪がわずか四五寸なものだから」

c. コノー]ダユ]ギデウムサレ]ル]モナ p69

「これくらいの雪でうめられる者は」

(8) a. マチ]マデ [カ]ウィイッテ[クレ]ーノ]モン[デ p62

「町まで買いに行ったくらいのもので」

b. マ]ジイッテ[ク]ルワ p78 「町へ行って来るよ」

(7)a は句頭文節全体が高平調であり文節内部での下降がない。(8)a は、文節第 2 音節後の下降である。(7)b と(7)c は共に連文節構造後続文節であるが、前者は下降がなく、後者は第 1 音節後の下降がある。

(5)から(8)が同じ型に属する、とすると、高平調か低平調かに関わりなく、文節内部での上昇を欠く、ということになる。柴田(1953)の「高くなるころなし」は、「文節内部に」を補えば、句頭文節についても連文節後続文節についても共通の特徴、ということになる。この方言のアクセント核がピッチ上昇を引き起こすものであるとすれば、この音形をもつものは「無核型」ということになる。

「無核型」とであるとすれば興味深いのは次のような、格助詞ノの接続例である。

(9) a. ヤ]マノヒロオ へ]ズッテイッタバ ホ]レ p70

「山の斜面を横切って行ったらほら」

b. トドガ]ソーノヤ[メァー p68 「とどが沢の山へ」

ヤマ「山」(2音節名詞第3類)は、連文節後続文節である(9)bでは、上昇幅こそ小さいものの、第2音節での上昇が聞き取れ、柴田(1953)のC型であると考えられるが、格助詞ノが接続する(9)aでは、「無核型」同様の、語頭子音冒頭から続く高平調句頭音節となる。これは、下げ核体系の東京方言で格助詞ノが接続する語(ハナノ「花の」、ヤマノ「山の」など)で語末核が脱落して無核になる現象と並行的に見える。同様の例がもう一つある。

(10) a. カ]デノ[ヨー]デ [ネァ]ムン(())ダケ]ム[ナー p59

「混ぜ飯のようではないものでしたね」

b. カ[デ]ヘァーネーデ p63 「混ぜものがはいらないで」

カデ「混ぜ飯」が、第2類(有核)の動詞カテル「混ぜる、加える」の連用形派生名詞であるとすれば、予想される所属型は2音節名詞第3類であり、(10)bはその予想に合うC型の音形であるが、格助詞ノが接続した(10)aでは「無核型」のピッチ形となっている。

動詞の類別では、中輪式では第1類が無核か語末核(例:カエ]バ「買えば」となるが、この語末核は児玉(2017)でいう「低結式」の境界特徴が降り核化により核に合流したものである。この仮説によれば降り核化を経ず高結式と低結式の弁別を失った体系ではす

べて無核になると予想される。大鳥方言の談話資料では、第1類の動詞の語形で、高平調句頭音節を持ち下降のある語形と低平な語形が両方現れる例が多い。

- | | | | |
|---------|--------------------|-----|---------------|
| (11) a. | ワスンニェアー[ヨー]ニ | p78 | 「忘れないように」 |
| | b. ワスン]ニェー[ド]ギャ | p78 | 「忘れないときは」 |
| (12) a. | カッテ[コイ]ジャー | p78 | 「買って来てください」 |
| | b. カッテ[ク]ル | p78 | 「買って来る」 |
| | c. カッ]テキ[ダ]ガ]ヤ | p79 | 「買って来ましたか」 |
| | d. カッ]テキ[ダ カッ]テキ[ダ | p79 | 「買って来た 買って来た」 |
| (13) a. | イッテ[ク]ル]ワイ | p78 | 「行って来るよ」 |
| | b. イッ]テ[コイ]ジャー | p79 | 「行っておいで」 |
| | c. カッ]テイ]グゾー | p75 | 「借りて行くぞ」 |
| | d. モッ]テ]イケジャー | p75 | 「持ってお行きなさい」 |

動詞第1類についても、下降の有無は語の弁別に関与していない。また、動詞語形は連文節構造の後続文節としての用例も多いが、この環境でも下降のある語形が現れる点も、名詞 (cf. 例文 7c.)と同じである。「文節内部に高くなる場所がない」という特徴がどの環境にも共通する。

柴田(1953)の音声記述では、長音節に後続して下降がある場合は、語末の場合 (hadu:]「鳩」 p427、gottso:]「ごちそう」 p429、do:ju:],「ko:ju:], so:ju:]「どうい、こうい、そ、うい」 p437)に限られ、その他はすべて音節内部の下降という表記となっている。しかし、大鳥方言の談話資料で音節内部の下降が聞き取れる例は非常に少なく、音節末からの下降とみられる場合がほとんどである。その中で、第1類の動詞の音便形に1例だけ、音節内下降の例がある。ただし、同じ環境でも音節末からの下降例があり、下降開始位置の違いはこの場合も有意ではないとみられる。

- | | | | |
|---------|----------------|-----|---------------|
| (14) a. | キ]ーダゴド[ネー | p73 | 「聞いたことはありません」 |
| | b. デアー]テ[ク]ル]ニ | p82 | 「抱いてくるから」 |

最後に、この無核型への所属語彙について考察する。外輪式体系で無核となるのは、1～3音節の名詞の第1類と第2類、動詞・形容詞の第1類である。談話資料で第2類のユギ「雪」とマチ/マジ「町」がこの型に属するピッチ形で現れていることを述べた。このうち、ユギの実現形は柴田(1953:432)にアクセント記号を欠く音声表記があり、柴田(1953:421)の注記から、この調査でこの語のアクセントが「調査もれ」だったことがわかる。しかし、「町」は(1)でB型の所属語彙として記載されている。さらに、(2)のB型のうち、「夏」と

「冬」は談話資料に一例ずつ出現例がある。

- (15) a. ナ[^l]ズノウ]ジダバ p58 「夏のうちなら」
b. フ]ユワダエーゴンスケ p60 「冬は大根漬け」

(15)a の下降幅は小さいが、気をつけて聞けば知覚できる。したがって、両方の語とも B 型である可能性はある。一方、本稿で着目する語頭音節の高平調であるが、(15)b は二人の話者の発話が重なる部分にありピッチ形を観察できない。(15)a は、冒頭の n で上昇があり、閉鎖の解放とともに上昇が緩やかとなるピッチ形で、聴覚的には高平調に聞こえる音形となる。

一方、(15)の二つの音形でもう一つ注目されるのは、下降自体のピッチ形である。(6)b の下降が典型的であるが、無核型の語で下降がある場合は、下降開始から徐々に下降が緩やかになり平進に近づく場合が多い。連文節構造の前部に現れ語頭上昇のない文節が後続する場合には両文節が平進に接続しているように聞こえる。(15)の二つの音形は、下降に関してはこの無核型の下降に当てはまっているように思われる。この分析が正しければ、大鳥方言も外輪式アクセントの一種であり 2 音節名詞の第 1 類と第 2 類は合流している、と見ることになる。

このような無核型の平進接続は、下降をもたない低平調あるいは高平調の音形とも共通する特徴である。本稿で「句頭高平調をもち下降のある音形」と呼んだものは、実は、低平調を基底形として、句頭部分のピッチが（平進を保ったまま）高い段階に上げられているもの、という分析も可能かもしれない。

1.2 語頭の上昇調

語頭音節の上昇調は、後続音節に応じて、HL（厳密には RL）と LH（同じく RH）の二つのピッチ形で現れる。2 音節名詞については、柴田(1953)で B 型と C 型の二つに分類されている語群を含んでいる。しかし、『全国方言資料』では、同じ語形が HL と LH の交替形をもつ場合が観察される。この二つの交替形は、下降開始の位置の違いによる交替であり、語頭に高平調をもつ場合と同様、語の弁別には関与しないということになる。

柴田(1953:439)は「B 型は原則として狭い母音音素/i/,/u/で終わる語」であるとしており、(2)に挙げられている例外は第 2 類の「川」のみである。まず、この条件で複数の出現例をもつ語を挙げる。

- (16) a. [[ア]ニア[マ[ドォ]ホ[ラ[ネー]ゲダ p68 「婿は窓を掘らないではないか」
b. [[ア]ニ]ダヨー]ダドコ]モ[アッ]シ [ナ p76 「若いようなところもありますしね」
c. [[ア[ニ]シテ[ユーバ p80f. 「(家の)若い者がしてよければ」

d. [[ア]ニ]シルシ

p81 「若い者がするし」

いずれもピッチ形では句頭音節全体の上昇調が現れる。(16)b ではアがやや長く、聴覚的にも上昇が聞き取れる。これに対し、(16)c は、ニが長く、ピッチのピークも第2音節側に聞こえる。

(17) a. [[キュ[ー]ワ ス[ドオ[デ]ル]ヒデ p69 「きょうはなだれの落ちる日で」

b. オレ[キュ[ー]ワ ユージアッ[サゲ p78 「おれきょうは用事があるから」

c. [[キュ[ー]ワ バ]スーコン(())デ p79 「きょうはバスが混んで」

(17)a と c は、句頭長音節全体が上昇調となり、上昇が聞き取れる。これに対して、先行文節があり、持続時間も他の2つよりかなり短い(17)b は、キューワの有声部のピッチ形が文節全体で上昇部のない下降調となる。しかし、下降開始ピッチは無声子音に先行する句頭の部分よりかなり高く、この無声部分が「高くなるどころ」を実現している。このような、上昇が句頭部分のみで実現するピッチ形は、(12)a-b や(13)a のような連文節構造後続文節の句頭上昇とよく似ている。

語末母音が狭い2拍名詞で複数の出現例があるのはこの2語のみであり、次の2語は単独の出現例である。ただし、アギ「秋」は(2)でB型に分類されているのに対し、LHで現れており、HLとLHの交替である可能性がある。

(18) a. [[ア[ギ]ニ(())ナ(())レバ p58 「秋になれば」

b. [[シ]ルワ p64 「汁は」

(18)a 冒頭のアはかなり長く、軋み音を伴う非常に低いピッチから急激にピッチを上げる。ニの母音はほぼ脱落しており、下降部分は短い。(18)b は、1文節1句の発話で、シの上昇の後、延伸された句末母音の終わりまで2音節にわたる下降が続く。

句頭音節の上昇調が現れるのは、名詞だけではなく、動詞第2類の2音節の語形に多い。

(19) a. [[ア]ル]ワイ p77 「ありますよ」

b. [[ア]ル]ガ(())ネーガ p77 「あるかないか」

c. ホン[ジム[ミ]ル]ワイ p77 「それでも見てみましょう」

d. [[ア]ル(())ア]ル p77 「ありますあります」

(20) フ[ル]ヒデフ[ル]ヒデ p67=(7) 「降る日で降る日で」

(19)の動詞、「ある」と「見る」は、いずれも第1音節の長い上昇のあと、文節末まで下降が継続するピッチ形となる。しかし、(20)の連体形「降る」は、ピークが第2音節側にあり、LHに聞こえる音形となる。この場合も、次文節の冒頭にかけて下降が実現する連文節構造となる。

動詞形は、連文節構造の後続文節に現れる場合が多い。先行文節が無核の場合、(12)a-bの「来い」「来る」, (13)aの「来る」のように文節頭で一気に上昇が実現し、第2音節が下降調となる場合が多い。

次に、語末母音が/i/,/u/ではないにも関わらず HL の音形が交替形として現れている語を挙げる。

- (21) a. [[ド]ゴ]ワ[リー]ト]モ p64 「どこが悪いとも」
 b. [[ド]ゴ]ノ]ショーモソーダ p65 「どこの人もそうです」
 c. [[ド]コ]ガ[イダガ] p72 「どこにいるか」

(21)の3つの発話は、冒頭で急激なピッチ上昇があることが共通するが、下降開始のタイミングが異なっている。(21)aは、ピークが音節境界付近にあり、2音節がいずれも高く聞こえる。(21)bは下降開始がそれより遅く、(21)cは早い。

- (22) a. [[カ[マー](I)ミネーデ] p74 「鎌が見つからないので」
 b. [[カ[モー]ー]チョッ(I)コ]リ p74 「鎌をちょっと」
 c. [[カ[マー](I)モッテ(I)キ]ダゼー p75 「鎌を持って来たよ」
 d. キン[ニャー](I)カ]マ]ダケン p75 「切れない鎌ですけど」

(22)の4例はいずれも、内部に上昇をもつ(本稿の立場では有核の)複数の文節が作る連文節構造となっている。この場合、後続文節の上昇幅は小さくなるが、上昇が短いため下降開始も早まると見られ、(22)dはこのために HL と聞き取られると考えることができる。(22)a-cはカマ「鎌」が先行文節側であり第1音節にじゅうぶんな上昇があり、いずれも LH に聞こえる音形であるが、下降開始位置が異なっている。(22)aでは下降開始が遅く、文節末まで非下降の後、境界付近で急激にピッチが下降する。(22)bでは下降は長い第2音節で開始され、下降調が聞き取れる。3文節から成り、文節の持続が短い(22)cでは、ピッチ形では下降があるものの、ほとんど聞き取れず、次文節冒頭で下降が停止する。

連文節構造の後続文節で広い語末母音に先行して下降開始が早まっている例は、第2類の2拍動詞形でもしばしば観察される。ただし、この環境の特徴はまず上昇幅が小さいということであり、LH に聞こえる発話や LH であるか HL であるかの判断がつかない発話も多い。

- (23) a. オ]キアガッテ [[ミ[タ]バ] p71 「起き上がってみたら」
 b. オレドゴ[ミ]タツケ p71 「わたしのところを見ていたっけ」
 (24) a. [[イ[マ]キダ]ワイ p79 「いま帰ったよ」
 b. カッ]テキ[ダ カッ]テキ[ダ] p79=(12)c 「買って来た 買って来た」

c. モツ[テ[キ]ダ

p79 「持って来た」

イマ「今」は、19の出現例がある頻出語であるが、ピッチ形はいずれも似通っており、第1音節全体が上昇調となり、第2音節から下降が開始し、後続の助詞（ノ、ダバ）があれば文節末まで下降が継続する、という音形になる。その中で、ピッチの上昇幅が小さい出現例が次の2例である。

(25) a. [[イマ]ノ コーミン]カンノ[ショ]ジシタヒドニ p68

「いまの公民館の主事をしている人と」

b. タッ[タ[イ[マ

p74 「たったいま」

(25)aは1文節1句でノに句末の母音延長がある。上昇幅が小さいのは焦点が置かれな
ことによると思われるが、下降幅も小さく、ピークがどちら側にあるかの判断がつかない。

(25)bは有核2文節の連文節構造であるが、第2音節への急な上昇の後、第4音節まで小幅
な上昇が連続する。

「今」の実現形にHLが現れていないのは、この語が連文節構造の後続文節として現れ
にくいことも関係しているだろう。2拍名詞の語末母音が狭いかどうかは、主として句頭
環境でのピッチ形に関与しているように思われる。この環境では、語末母音が狭くない場
合には下降開始が遅いLHでの実現が安定しているようである。マド「窓」の2つの出現
例はいずれも、(22)aと同様な、文節末まで非下降のピッチ形である。『全国方言資料』で
は表記に違いがあるが、音声を聞く限りではいずれの場合もドは長く、音節末まで上昇が
続き下降は次文節冒頭となる。

(26) a. [[マ[ド]アゲ]ダッテモ p67 「窓を開けてあっても」

b. [[マ[ド]ホ[ラ[ネー]ゲダ p68 「窓を掘らないではないか」

第1音節が長音節で、その全体が有声の場合は、この音節内部での上昇が聞き取りやす
い。

(27) a. [[ナン]ブ]ユ[ダベア p77 「いくついるのですか」

b. [[ナン]ブ]デ[ウッテダ]ベ p77 「いくらで売っているのかい」

(28) a. [[ジュー]ゴ]シャクク[レー]ワ p68 「15尺くらい」

b. [[ナエ]デ]モ[ケー]テ]ユードモ p64 「何でも食べろと言うけれども」

(29) a. [[ダーレモ()]オ[シー]ヒド [[ネー]モンダモン [ナー]] p60

「だれもほしがる人がないものだものねえ」

b. [[ダ]レ]モ ホッ[テ]モラワネー]デ p71 「だれにも掘ってもらわないで」

句頭の長音節に上昇調が出ている場合、後続音節の母音に関わらず第2音節冒頭から下

降が現れている。(29)aはこの例外となっているが、第1音節の母音の延長が音声的な変異であることで説明できるだろう。

句頭長音節をもつ語の冒頭Lのピッチ形は、2音節の五段動詞第2類音便形(イ音便・撥音便)にも観察される。

- (30) a. [[ツイ]ダ p59「搗く」, [[コイ]デ p79「扱く」, [[ノン]デ p79「飲む」
b. [[コン]デ p79「混む」

一方、句頭長音節に促音を含む場合には、促音に先立つ短い有声部が上昇調であるか高平調であるかの判断が難しい。下降開始の早いHLの音形となるのは次のような例がある。

- (31) a. ミ]ナ [[ウツ]タ[モンダ]ハゲ p72 「みんな落ちたものだから」
b. [[オツ]ティ]キダ[ワゲ]ダ p70 「落ちてきたわけだ」
(32) a. ド]キョーガ[アツ]ケ]ジャ [ナ]] p69 「度胸がありましたねえ」
b. [[ア]ド]サー [[ミツ]ダ]ワ[ケ]ダ p72 「うしろで見ていたわけだ」

2音節の五段動詞第2類の促音便形は、以下のようにすべて下降開始の遅いピッチ形で出現していて、第2音節まで上昇を保つことにより上昇調を実現しているようにもみえる。

- (33) イツ]テ p58「煎る」, クツ]デン]ド]モ p59, クツ]タ] p60「食う」, モツ]タ] p63, モツ]ダ] p67, モツ]テ] p74ff.「持つ」, ナツ]テ], ナツ]テ]ル p65, ナツ]テ p70, ナツ]ダ] p71「なる」, フツ]タ] p69「降る」, トツ]タ] p70, トツ]テ p79「取る」, ホツ]テ] p71「掘る」

しかし、明瞭な句頭音節上昇調をもつ第2類動詞トゥール「通る」の促音便形は下降開始の遅いピッチ形で出ており、上昇の実現と下降開始のタイミングの関係は相補的とはいえない。

- (34) a. アブネードゴ[[トゥー]ル]マデ p72 「あぶないところを通るまで」
b. オイラ[[トゥー]ッタ]ラ[トゥー]ツ]ティ p72 「私たちが通ったら通ろうという」

動詞以外で句頭長音節の促音に続き上昇が持続する語は以下のようなものがある。

- (35) a. [[ジツ]ケン]ア]マリオド[サツ]デ p68 「10間あまり落とされて」
b. [[サツ]ケ]ダ キ]ダ p69, p72 「さきほど来た」

(35)aは促音部分で中断のある発話であるが、中断に先立って母音部分に明瞭な上昇調がある。(35)bは2例とも促音の無声部が短い。

以上のように、大鳥方言談話音声資料の句頭音節に上昇調が現れる語形は、名詞・動詞とも、東京方言の語頭核をもつ語に対応する語が多い。柴田(1953)では下降の位置によって2音節名詞がB型とC型に二分されているが、下降開始の位置が語の弁別に関与せず、

上昇開始のある音節が核であるとすれば、2音節名詞第4類と第5類は、語頭核をもつ類としてまとめられることになる。また、有核の第2類動詞のうち、2音節の動詞形も語頭核をもつ動詞形とみなすことになる。

1.3 語頭の低平調

1.2では、柴田(1953)のC類、つまり、LHの音形をもつ2音節語のうち、第1音節に上昇があるものを語頭核であるとした。本節では、第1音節に上昇がなくLHの音形をもつものが1つの類を成すことを主張する。LHのLが、上昇調かそうでないかによる弁別が可能である、という主張である。

上昇核(昇り核あるいは上げ核)をもつ体系では、核より前に位置する音節でピッチが上昇してはならない。大鳥方言の談話資料でも、長い語形や複合語にこの条件をみたす冒頭からの低平調が現れているものがある。

- (36) a. カモサ[レ]ル[()ヨー]ニ ナツ[テ] p64 「かき回されるようになって」
 b. ジューニエン[ズ]ズ]ダ ワイ p77 「12円ずつです」
 c. ホドゲ[サ]メア p80 「仏さまに」

また、冒頭が高平調となる無核型と似たピッチ形になる場合もある。この場合も、語末側の核の位置までは上昇がない。

- (37) a. ツ]ブ[メ]シワ [ナー]] p59 「粒飯はね」
 b. ロク]ジュー[エン]ダ ナー p77 「60円だねえ」
 c. カセ]ラ[ニエー]モン]ド p64 「食べさせられないものと」

大鳥方言の語頭核が語頭音節の上昇として実現するとすれば、第2音節以下に核がある場合には、第1音節が非上昇でなければならない。談話資料に現れるLHの音形の頻出語彙を探すと、このような非上昇の第1音節が一貫している語として次のようなもの(アガ「赤ん坊」、アネ「嫁」、バ(ン)バ「婆」)がある。

- (38) a. ア[ガー]イッペー[テ] p63 「『赤ん坊は一杯』と言って」
 b. ア[ガ]ニヤ サ]ラサ p63 「赤ん坊には皿に」
 c. ア[ガ][[ミ]サ]キダ ワイ p81 「赤ん坊を見に来ましたよ」
 d. ア[ガ]モ]ア[()ネモ マメ]ダ[ロー ガイ] p81 「赤ん坊も嫁も達者でしょうね」
 e. ジョーブ]ダア[ガ]ダ ワイ p81 「じょうぶな赤ん坊だよ」
 f. ア[ガ]ニ]クッデクレバ]イエシ p81 「赤ん坊にあげて下さればいいし」
 (39) a. ア[ネ]ダ]ド[()ギ]ダバ p62 「嫁のころには」
 b. コリヤ]ア[ネ]ニ]クッデクレ]ジャ p81 「これは嫁にあげて下さい」

(40) a. バン[バン]シデーユーゴダバン[バ]シルシ p80

「婆(わたし)がしていいことはわたしがするし」

b. バ[バ]ーダツケ]ゲ p76 「婆さんじゃないか」

2 拍名詞第 3 類コナ「粉」、アシ「足」、トシ「年」は単独の出現例のみであるが、語頭音節が低平である点は上記の 3 語と共通している。

(41) a. コ[ナ]ニ]シデ p59 「粉にして」

b. ア]ノト[シャー p68 「あの年は」

c. ア[シー]トツ(D)タ p71 「足をさらわれたのですか」

助詞ノの接続による無核化の例として挙げた(9)bの「山」、(10)bの「かて」も第 1 音節が低平である。その他の第 3 類の頻出語彙には、ドギ「時」、モノ「もの」、ゴド「こと」などもっばら連文節構造の後続文節に現れるているものが多いが、これらは上昇幅が小さく、全体として低平に聞こえる発話が多い。

(1)の第 4 類・第 5 類 A 群と第 3 類が合流しているとされる方言や助詞接続のみで弁別されるとされる方言は、青森、秋田、鶴岡など報告が多いが、第 1 音節のピッチ形の差が弁別的であるとすれば、大鳥方言の場合は、前者が上昇調、後者が低平調で、それぞれ名詞単独でも弁別が保たれていることになる。アクセント核のある音節でピッチ上昇が開始される体系であるとみれば、前者が語頭核の型、後者が第 2 音節に核をもつ型、ということになるだろう。談話音声資料に、イマ「今」の出現例が 19 あることを述べたが、そのうちの 9 例は助詞ノが接続したイマノである。この中に、(9)a や(10)a のような、無核型の音形が 1 例も現れていないことも、二つの型の弁別が保たれているとする主張を支持する。

第 1 音節の上昇調の有無による型の弁別は、2 音節名詞に限らない。たとえば、イ[ノ]ジ p70 「命運」、タ[マゴ p77 「卵」、イ[ズズ p77 「5 つ」(但し イズズグ[レー 「5 つぐらい) やフダ[リ p71 「2 人は」の第 1 音節が低平調であるのに対し、[[ミ[ゴ]ト p71 「みごと」は上昇調であって、[[ユ]ク]ジ p63 「意気地」や[[ワ]ズ]ガ p69 「わずか」と同様に語頭核型である可能性がある。

1.4 体系の解釈

柴田(1953)の A~C 型との対比のため、(42)に 2 音節名詞の分析をまとめる。ただし、この核の有無と位置に応じた分類は、動詞の各語形とも共通である。各音節の声調を、H (高平)、L (低平)、R (上昇)、F (下降) で表わし、核のある音節には右側に"*"を付す。["と"]は、音節間の上昇と下降である。

(42) 無核型 2 音節第 1 類・第 2 類 LL~H]L~HH] A 型・B 型

語頭核型	2音節第4類・第5類	R*F~R*H]	B型・C型
次音節核型	2音節第3類	L[H*(F)	C型

2音節名詞第4類・第5類のU類は、句頭でR*Fの音形をとる場合にFの下降開始がA類よりも早くなりやすいが、これは予測可能な変異であると考えられる。型の統合自体は、周辺の外輪式体系と同じである。

1.1で、無核型は文節内部にピッチ上昇の現れない型であるという分析を示した。この型では、文節頭側が高平となり文節内部のどこかに下降が生じていても型の弁別には関与しない。一方、有核型は、アクセント核のある音節でピッチが上昇を開始する。この上昇の後、ピッチ形は次文節の冒頭までに下降しなければならないが、この下降の開始位置がどこになるか、あるいは、ピッチ上昇がどこまで続くか、が型の弁別に関与しない。また、アクセント核が第2音節以降にある文節の場合、アクセント核に先行する部分にピッチ上昇が現れてはならないが、文節頭側が高平となりアクセント核に先行する部分に下降が生じていても型の弁別には関与しない。

この体系は、アクセント核を担う音節で上昇が開始される、という点で、「昇り核」の体系とみることができる。しかし、この音節で上昇が完了する昇り核体系とは異なり、アクセント核の次音節が核のある音節より高い、ということがありうる。一方、アクセント核の位置で上昇が開始ししてもよいが、上昇は次音節まで持続しそこで完了しなければならない、という体系があるとすれば、この体系は「上げ核」の体系とみることになる。

つまり、大鳥方言の体系は、次音節で上昇が完了する「上げ核」体系と核音節で上昇が完了する「昇り核」体系との中間に位置するという解釈が可能なのである。アクセント核次音節の母音が広い狭いかに応じて下降の実現開始が異なる、という点は、旧鶴岡市など周囲の昇り核体系と似ているが、これらの体系で失われかけている2拍名詞第3類と第4類・第5類A類の弁別が大鳥方言では名詞単独でも維持されている、という点を考慮すると、変化の方向は上げ核から昇り核へであった、とみななければならない。児玉(2017)では、2拍名詞第3類と第4類・第5類A類の弁別の喪失を、上げ核から昇り核への変化の進行が語末核と次音節が狭い場合に先行したことで説明できる可能性に言及したが、大鳥方言はこの仮説を裏付けるものとなっている。

2 旧種市町中野方言

柴田(1967:16)のアクセントの概観は、2音節名詞の各類に1音節助詞が接続した文節の音声形の、東京方言・盛岡方言との比較であり、この体系の型の統合が外輪式であることを述べている。(○をH、●をLに置き換える。)

(43)		東京	盛岡	中野
	第1類(「鼻と」)	LHH	LLH	LHL
	第2類(「橋と」)	LHL	LLH	LHL
	第3類(「花と」)	LHL	LHL	HLL
	第4類(「箸と」)	HLL	HLL	LLH
	第5類(「汗と」)	HLL	HLL	LLH

この説明は、柴田(1988:425-436)に再録された「ズーズー弁でない東北方言」(初出: 1961)の記述でもほぼ同じで、違いは盛岡の体系が岩泉町安家・茂師、種市町小子内と共通であることが明示されている点と、盛岡の体系と中野の体系の間の通時的関係について、両方向の可能性を挙げている点である。後者に関連し、中野集落への移住伝承についても考察している。これに対し、柴田(1967)では、盛岡の体系から中野の体系への変化を、Hの1拍前ずれであると結論付けている。

この説明は、児玉(2017)の、上げ核の昇り核への変化によってHが1拍前にずれた、という仮説を取るならば、Hが2拍前にずれた、ということになる。Hの前ずれを認めない立場もあることを考慮すると、違う説明が必要である。そこで、核の位置は変わらず、核の種類のみが変わった、という可能性を考える。

(44)		東京(下げ核)	盛岡(昇り核)	中野(降り核)
	第1類	LHH	LLH	LHL
	第2類	LH*]L	LLH	LHL
	第3類	LH*]L	L[H*L	H]L*L
	第4類・第5類	H*]LL	[H*LL]L*LH

この仮説では、盛岡方言の無核型に接続する助詞のHが核によるものではないのと同様、中野方言の助詞のLは核ではない、ということになる。また、これに先行する次末のHも、有核型の核に先行するHとは異なるふるまいをすることが予想される。一方、語頭核の]L*は、上げ核(及び下げ核)の語末核が連文節構造の先行文節に現れた場合(例: 花]高し)に発現する特徴をもつと同様に、連文節構造の後続文節で何らかの特徴的なピッチ実現があると考えられる。

本節では、これらの点を中心に、談話音声資料に現れる頻出語の音形の変異を観察し、さらに、この体系が現存する降り核体系である、という仮定のもとに、児玉(2017)では下げ核の先行段階としてのみ仮定した降り核が、どのような音声的実現をもちえたかについて考察する。

2.1 無核語文節の境界特徴

中野方言の談話音声資料を聞いて特に耳につくのは、文節頭が高い語頭隆起的な発話である。この点では同じ三陸海岸の宮古方言の談話音声資料とも似ている。しかし、中野と宮古で決定的に違うのは、どういう語で語頭が高いか、という点である。宮古方言の場合は、無核語の文節頭から高い発話が目立つのに対し、中野方言では長い無核語文節は語頭から低平となり、文節末側に卓立音節をもつ。これは、降り核体系に予想される特徴でもある。降り核体系では、有核語の核に先行する部分は高くなければならぬので、第2音節以降に核のある型では語頭側が高く、語頭核型では低くなる。無核型は、下降のない型であり、高平調か低平調かのいずれかでなければならない。低平調の場合、語末音節の隆起は許容される。語末音節の後で下降があっても有核語との混同の余地がないからである。(44)の2音節語+1音節助詞の文節のLH(L)は、Hが語末固定であるか、文節次末かの両様の可能性があるが、談話音声資料で判断する限り、無核型のHは文節によって出現する位置が決まり、同じ語であっても文節の長さが異なればHの位置は変動する。

- (45) a. コド[モ]ー]モテ[バ [ド]ー [ナ]ー p30 「こどもを持ってばなおね」
 b. コドモ[エ]モキ[シェ]エナカッ[タ]コッ]タシ p32
 「こどもにも着せてやれなかったようだ」
- (46) a. ツケモンダエ[コ]ー[クェ]テアドン[テ p35
 「だいこんづけを食べたいと思って」
 b. ツケモンダエコ[マ]デー p35 「だいこんづけまで」
- (47) a. シャグ[エン]ニ[マ]ゲデクン[セア]デアー p49 「100円にまけてくださいよ」
 b. シャグエン[ニア]マ[ゲ]エ[ネアガ p49 「100円にはまけられません」

Hは、助詞の接続しない名詞で語末母音が延長されている場合のように、拍単位で後ろから2拍目になるものもあるが、次末音節全体となっているものもある。また、次末音節の母音が狭い場合(無声化する場合を含む)に、次々末音節からHがはじまる場合もある。

- (48) a. シェン[ダ]クワシナ[ガー]ラ(l)ナンナカ]ベー[ス p30
 「裁縫はしなければならぬだろうし」
 b. シェン[ダ]クオシ]テモラ]ウズー[コ]ドモ p30
 「裁縫をしてもらうということも」

(48)bは無核型が4つ連続する連文節構造であり、後続文節では上昇が聞き取れないが、後続の文節との境界は下降によって示される。一般に、無核型の文節が連続する場合には文節末にHLが現れ、東京方言のような平進接続にはならない。

- (49) a. カラ[ダ]ージョー[ブン][シー]ヨー p53 「からだをじょうぶにするように」
 b. [コ]ノオ[カ]デシゴ[ド]ー[シッ]トオ[ナシ]テ p37

「この陸で仕事をするのと同じように」

HLの有無と位置は、連文節構造で後続文節の型によっても変異する。語頭核の文節が後続する場合は、Hが語末音節に現れる。核が文節第2音節にあり、頭音節がHとなる場合は、Hが現れず、先行無核型文節全体が低平調となる。

- (50) a. クラ[グ]ナレバ p51 「暗くなれば」
 b. クラ[グ][ナン]ネーヒッ p51 「暗くならないうちに」
 (51) a. コメ[ノ]ケアモ p34 「米のかゆも」
 b. コメ[ノ][ケア]コデモ p34 「米のかゆでも」

(51)のコメ「米」は、2音節名詞第3類であるが、助詞ノが接続して無核文節となっている例である。

連文節構造の後続文節が語頭核をもつ場合の先行文節末のHは、次節で述べるように、先行文節が無核型ではない場合でも出現しており、むしろ降り核としての語頭核に結び付けられる特徴であって、無核型の特徴と分析しない可能性もある。

つまり、文節末にHLが出現する場合は、句末であるか、あるいは後続文節が無核型となる連文節構造ということになる。後続文節が有核で核が文節第3音節以降にある場合は、後続文節の頭音節がやや低く核の先行音節をHのピークとする上昇となるが、この前の無核型文節に現れるHLについては、句末でないとは判断できる例が談話資料にはみあたらなかった。(52)bは、アタリ「当時」の核の位置を含めさらに検証が必要な例である。

- (52) a. ソ[ノ]ジッキワ p33 「そのときは」
 b. ソノア[タ]リアー ドー p36 「その当時は」

2.2 語頭核語文節の境界と語頭核の反線状性

(43)で2音節名詞第4類・第5類に記録されている右端のHは、助詞であるので、無核の第1類・第2類の次末のHと同様、アクセント核ではなく文節末に結び付けられるものである。中野方言の語頭核語は、文節内部に下降がなく、上昇が現れる場合は文節末側に限る、という点で無核語によく似ている。違いは、語末側に現れる上昇が無核語のようなHLではなく、Hである、という点と、このHが出現する環境である。

上昇のない低平な音形は、典型的には連文節構造の先行文節に現れる。この場合、後続文節が低くはじまる無核型や、核が第3音節以降にある語中核型の場合には、文節境界を示すようなピッチの下降や上昇がない平進接続となる。

- (53) a.]エマノフツ[ト]ア p31 「いまの人は」
 b.]イマドアチ[ガッ]テ p31 「いまとは違って」
- (54) a.]テデコ[サッ]テ p31 「手で作って」
 b.]テデ[バー]リ p31 「手でばかり」
- (55) a.]ミデキ[レ]ン]ネ p52 「見てくれよ」
 b.]メン[ドー]ミテクン[セー]ー p45 「めんどろをみてください」

低平といっても、厳密に言えば語頭音節がやや低いものや、全体としての上昇が観察されるものもある。たとえば、(53)a は、冒頭のエが低平で、次音節との間に急な上昇がある。このようなピッチ形は、文節末が高いというよりは、アクセント核のある音節を低くするという力が働いているようにも思われる。しかし、(55)のように、冒頭の低めがほとんど知覚できない発話もある。

文節末音節が明確に高いのは、この音節が句末音節である場合と、連文節構造で後続文節が語頭核をもっている場合である。まず、句末音節の例を挙げる。

- (56) a.]ナナシロ[モ]ナナシロ]ハン[モ p37 「7 尋も 7 尋半も」
 b.]サンジョー[モ]シショー[モ p42 「3 升も 4 升も」
 c. ト[ナ]リ]ノ]バ[バー]ハ[エー]ナ]モシ p44 「隣のばあさん早いね」

(56)a は、最初の出現例の語頭のナが低い。(56)b のサンはむしろ下降気味で、次音節から上昇に転じる。(56)c は、「早い」が強調的な発話となっているが、語頭側のハを低くすることによってピッチ上昇の幅を広げている。「降り核」の実現として、このようなピッチ低下の場合がある、という点も、無核型との違いとなっている可能性がある。これとの関連で興味深いのが、次のピッチ形の異なる発話例である。

- (57) a.]イギ[ツ[ガ]ネアガ p38 「息をつかないが」
 b. イギーツカ[ネ]ア]ノダモ]ノ p43 「息をつかないのなもの」

(57)a では、低平な語頭音節が第 2 音節より低い、(57)b の連体修飾構造の、女性話者による 2 回の発話では、修飾部の次末拍まで低平な発音となり、全体として無核型に統合しているように見える。ただし、先行する男性話者の同じ構造の発話では、動詞側は(57)b と同じであるが、語頭のイからの上昇がある点では中間的である。

連文節構造で後続文節が語頭核をもつ場合には、先行文節が無核型の場合と同様に、語頭核型の文節でも文節末音節が高くなる。

- (58) a.]ヨ[グ]ヘア[グ]キテ p51 「よく早く帰って」
 b.]ヘアッ[テ]ヘア[グ]マン[マー]グット[ゴ]ゼア p51

「はいつて早くご飯をお食べなさい」

後続文節が語頭核をもつ連文節構造は、「～てくる」「～てみる」などの補助動詞構文や、「～など」「～ぐらい」などの付属語構文の例が多い。これらは、先行文節の型に関わらず先行文節末に上昇がある。

- | | | | |
|---------|--------------------|-----|---------------|
| (59) a. | ハ[ダ]オツテ | p31 | 「機を織って」 |
| | b.]ママデ[モ]クテ | p53 | 「ご飯でも食べて」 |
| | c.[ヌー]ガ[オ]クタン[ダ]モノ | p33 | 「ぬかを食べたものですよ」 |
| (60) a. | カッ[テ]キテケト[ゴ]ザエ | p51 | 「買ってきてください」 |
| | b.]トッ[テ]クツケ]ジョ | p38 | 「取って来たものですよ」 |
| | c.[ク]グッ[テ]クレバ | p38 | 「もぐって来れば」 |
| (61) a. | サカ[ナ]ナゾア | p34 | 「魚などは」 |
| | b.]サン[ベア]グレア | p35 | 「3 ばいぐらい」 |
| | c.]エマノヒ[ト]ヨッ[カ | p38 | 「いまの人よりは」 |

このように、連文節構造の後続文節の語頭核が先行文節の語末音節を高くする働きをもっていることは、上野(1975)の「(高)低核」、後の「降り核」のもつ「反線状性」をよく示している。

2.3 語中核の実現形

中野方言の談話資料に出現する 2 音節第 3 類の名詞には次のようなものがある。

- | | |
|---------|--|
| (62) a. | [コ]メ p33f. 「米」、[ヌー]ガ p33 「糠」、[ダ]シ p34 「出汁」、[カ(リ)]ギ p42 「鉤」、
[ハ]マ p42 「浜」、[エ]ー p44,p51 「家」 |
| | b. コメ(ノ) p34 「米」、アミ(ノ) p42 「網」 |
| | c. モノ 「もの」、ゴド 「こと」 |

(62)a の各語は、いずれも句頭で、第 1 音節が冒頭から高い高平調となる。「鉤」は、後続文節の]モツテの語頭核に助詞を介さずに接続しており、そのために第 2 音節の下降が小さくなっているが、この例を除くと、核のある第 2 音節は急激なピッチ下降がある。出現例の多い(62)c は、専ら連文節構造の後続文節に現れるが、語頭の上昇を欠くものがあったとしても、第 2 音節への下降は低いピッチでもほぼ聞き取れる点が特徴的である。ゴドは、「いいこと」での出現例が多いが、ピッチ形の異なるものがある。

- | | | | |
|---------|--------------------|---------|--------------|
| (63) a. |]イ[ー]ゴ]ドーシダー | p45 | 「うまくいった」 |
| | b.]エー[ゴ]ド]エー[ゴ]ド | p52 | 「いいこといいこと」 |
| | c.]エー[ゴ]ド[オ シタ [ナー | p52,p55 | 「いいことをしましたね」 |

3音節以上の名詞で第2音節にアクセント核があるものとしては、[メ]ガネ～[ミ]ガネ p38f.「眼鏡」と[マ]ナク～[マ]ナコ「眼」 p33,p38 にそれぞれ3回の出現例がある。いずれも第1音節は高平調となる。アクセント核のある第2音節は下降調となるが、下降はこの音節で終わり、第3音節とそれに続く助詞は非下降となる。下降に関して第2音節に際立ちがあることも、先行音節に核を置く下げ核と見るのではなく、この音節の降り核と見たほうがよいとする根拠の一つとなる。

3音節3拍の名詞で語末にアクセント核による下降が出ているものは、それぞれ単独例であるが、オ[ド]ゴ p30「男」、ナ[ガ]ラ p36「(長い1本の)まま」がある。いずれも冒頭の2音節は上昇調で、アクセント核のある第3音節で下降する。オドゴの語末音節には、ほぼ同じピッチで平進の助詞ヨリ「より」が接続しているが、この助詞が]ヨッカ「より」と同様語頭核を持っているアクセント単位であるのか、アクセント核をもたない付属語であるのかは、この資料だけでは判断できない。ナ[ガ]ラは接続する助詞デ「で」が高いが、この上昇は句末イントネーションによるとみられる。

2音節3拍の名詞としては、[ケア]コ p34「かゆ」、[ソー]ヨ p35「醤油」、[テ]アジ p55「大事」があるが、下降開始位置の違いが弁別的かどうかはさらに検討が必要である。

動詞第2類の3拍以上の語形や、第2類に助動詞（「たい」「れる」「られる」「さる」「える」）の接続した文節は、すべて語中核型となり、語頭からの上昇が観察される。また、4拍以上の複合名詞でも語中核型とみられる名詞は多い。ただし、本稿では形態論的な予備分析は行なわない。

2.4 通時的な解釈

中野方言を（下げ核ではなく）降り核体系と分析する根拠は、以下の3点である。

- (64) a. 句頭の語頭核が核音節のピッチを下げる傾向がある。
- b. 連文節構造で後続文節の語頭核が先行文節の文節末音節を高くする逆行的（予期的）ピッチ変化がある。
- c. 語頭核音節のみで下降が継続し、次音節以降は「低」であっても非下降である。

もしもこの分析が正しいとすれば、上野(1975)で提案された4種のアクセント核のすべてが現代の日本語方言に確認されたことになる。また、昇り核方言に囲まれて降り核体系が維持されている、という地域的分布も、日本語アクセント史を考えるうえで重要な手がかりとなると考える。

以上の分析では、アクセント型の類の統合や、それぞれの型のアクセント核の有無と位置は、中野方言でも周辺の昇り核方言でも同じである、と仮定している。変化が起きたの

はアクセント核の実現するピッチ変化の方向だけである。この点では、中輪式の下げ核方言に隣接する山梨県奈良田方言などの上げ核体系とよく似ている。類の統合が同じである、ということは、共通の変化を経ていることで説明される。これらのピッチ変化の方向の逆転している体系の存在をもっとも無理なく説明するのは、アクセント核の種類のみが変化した、という仮説である。

もっとも単純な説明は、上げ核から下げ核へ、降り核から昇り核へ、といったピッチ変化の方向の逆転があった、というものである。しかし、(すでに習得した二つの体系の間の切り替えではなく) 音声のピッチの高低の鏡像関係を瞬時に把握して変換できるような認知能力の存在を仮定しない限り、このような変化は考えにくい。本稿では、関東では上げ核と下げ核へ、東北では昇り核と降り核へ分岐した、第3の祖体系をそれぞれ仮定することによって説明することを試みる。

中輪式の場合、児玉(2017)では、現在の下げ核体系に先行する段階として、降り核体系を仮定した。ピッチアクセント祖体系としては上げ核体系を立て、この上げ核体系が降り核体系に変化することにより、本来無核型で低結の境界特徴をもち語末音節がLであった型が語末降り核型に合流して中輪式の体系が成立した、と考える。型の統合が同じである奈良田方言も、ここまでの変化は経ているはずである。他の中輪式諸方言が、降り核からいわゆる「一拍ずれ」を経て下げ核に移行する変化が及ぶ前に、奈良田方言では、再び上げ核に戻った、と考えるのである。

祖形である降り核体系が、中野方言のように、アクセント核の音節にのみ下降を実現する体系であったとすれば、降り核から上げ核に戻る方向の変化もじゅうぶんに考えうる。中野方言の場合、アクセント核のある音節の次音節以降ではピッチ曲線の下降が止まるため、実際にはピッチ上昇がなくても、聴覚的には下降の後で上昇に転じる、上野(1975)の「アクセント低核」に似たものとなっているからである。降り核から上げ核に戻ると、他の地域で起きた下げ核への変化は及ぶことができなくなり、上げ核と下げ核の2体系が分岐する。

中野方言と外輪式昇り核方言のほうは、先行段階を上げ核体系だったと考えれば説明がつく。この段階ですでに、無核型の高結式と低結式の区別を失った外輪式の類の統合を経ており、無核型は「文節内部に上昇をもたない」という弁別特徴をもち文節末側の上昇により文節を単位として境界を示しうる語声調的な性質を帯びていただろう。有核型の上げ核が上昇開始を早め、昇り核となる変化は東北地方北部に波状的に広がったと考える。しかし、中野方言ではこの変化が及ぶ前に、上げ核が降り核へと変化していたとすれば、も

う昇り核への変化は適用できなくなり、2つの体系の分岐が説明できる。

児玉(2017)では、上げ核から降り核への変化を、外輪式も含め関東から九州に至る広範な地域に波状的に広がった変化であると仮定した。中野方言で起きたのはこれと同じ変化であるが、孤立していたために、西日本側で引き続き起きた降り核の下げ核化が及ばず、降り核体系が維持されたのだと考える。

これまで中間段階の仮説としてのみ想定されていた降り核の体系が実在していた、ということになれば、その価値は大きい。たとえば、中央式と内輪・中輪式や垂井式などの中間的な諸体系の下げ核化に際する系統分岐の鍵を握っているのは、語頭核である。中野方言の連文節構造後続文節の語頭核は、先行文節に対する低起性という中央式と似た側面と、下降の開始という下降核（下げ核～降り核）的な側面の両方をもっていることがわかる。一方、連文節構造の先行文節では、無核型と語頭核型がよく似た（対立が中和することもある）低平のピッチ形をもっており、高起と低起の式対立や語頭核の下げ核化が成立しなかった垂井式の体系でしばしばこれらの型（2音節名詞の第1類と第4類、2音節動詞形）が弁別を失っていることもこのような降り核体系の段階に結びつけることができる。

3 まとめ

以上が、二つの談話音声資料の分析によって導かれる、これらの方言のアクセント体系の音韻解釈に関する仮説と、それが日本語アクセント系統史の解釈にとってもつ意味のあらましである。これらの体系の存在をもっともうまく説明するのは、これらの方言と東北地方の昇り核体系の共通の祖形として上げ核体系が存在した、とするものである。

資料とした音声資料は短く、分析した語も限られているので、可能であれば調査票調査を含めた検証が必要なことはいうまでもない。しかし、特に音韻解釈を目指す場合には、調査票調査に先立ってじゅうぶんな談話音声の分析が必要である、ということも本稿の主張のひとつである。可能な変異形のデータの収集に関しては、調査票調査で談話資料音声を補うことは期待できない。大鳥方言に関しては、無核型の下降位置の揺れに着目して上昇の有無と位置による弁別であるとする柴田(1953)の先行研究があり、この点を大いに参考にしたが、柴田(1953)がHとLの段階を有意味であると解釈したのに対し、本稿では、談話音声資料内での変異に基づいてこの仮説を棄て、より一貫した特徴として、句頭音節のピッチ形を選び、柴田(1953)のA類とB類の一部、B類の残りとC類の一部を統合し、C類を分割した。また、中野方言について柴田(1988)は音声形を提示するのみで音韻解釈を行っていないが、談話音声資料で特に連文節構造に着目して、先行文節に対しても逆行的（予期的）にピッチ形を決定しうる降り核の存在を指摘した。

パロール、つまり個別的・連続的に変異する具体的な音声資料からその解釈（ラング）を導くのが言語学的方法である以上、談話音声資料の分析は音声研究の不可欠の要素であると考え。とくに、よく知られていない弁別体系の分析についてはこの点を特に強調したい。

昇り核と上げ核、降り核と下げ核という同じ方向の核が連続的であることを示唆した児玉(2017)の補説として、本稿で導入したのは、上昇（下降）の開始と完了という観点である。この連続性は、以下のようにまとめられる。

- (65) a. アクセント核の次音節で上昇（下降）を開始する上げ核（下げ核）
b. アクセント核の次音節で上昇（下降）を完了する上げ核（下げ核）
c. アクセント核の音節で上昇（下降）を開始する昇り核（降り核）
d. アクセント核の音節で上昇（下降）を完了する昇り核（降り核）

これらは、4種類の離散的な音韻解釈であり、「連続性」というのは、これらの実現形が相互に重なりをもつ、ということを示している。このような重なりをもつ実現形の音韻解釈が変わることにより、可能な実現形の変異の幅が変わる、という形でピッチアクセントの変化を説明する仮説である。たとえば、大鳥方言 2 拍名詞第 4 類・第 5 類 A 類の第 2 音節が高い音形は、(65)c の昇り核体系では語頭に上昇調をもつ語頭核であるが、(65)d の昇り核体系では次音節核であると解釈され、(助詞が後続しない) 第 3 類と同様な実現形をもつようになる。同じ音形でも「核の後退」となる。

大鳥方言は(65)c の段階の昇り核であり、(65)d の段階の外輪式昇り核諸体系に先行する段階である、とみる。中野方言は、(65)d の段階の降り核である。下げ核体系でも、東京方言のように核音節の後続部分が複数音節にわたって下降してもよい(65)a のタイプの下げ核と、下降があるのは次音節だけで、その後は平進に戻るか上昇するかどうかだけが許容される(65)b のタイプの下げ核が区別できるのではないかと考える。

この、「開始」と「完了」の観点は、昇り核と下げ核、降り核と上げ核のような方向の反転するタイプの核種変更の変化の説明にも有効である。(65)の a と d は、次のように言い換えることもできるからである。

- (66) a. 上昇（下降）の開始に先立って、アクセント核の音節で下降（上昇）を完了してもよい核=(65)a
d. 上昇（下降）の完了に続いて、アクセント核の次音節で下降（上昇）を開始してもよい核=(65)d

つまり、これらの体系は、変異形として逆方向のピッチ変位が出現しうるので、(65)a

はそれぞれ逆方向のピッチ変位を起こす(65)d と、可能な実現に重なりをもつことになる。どちら側のピッチ変位を弁別的とみなすかによって、核の方向は逆転する。

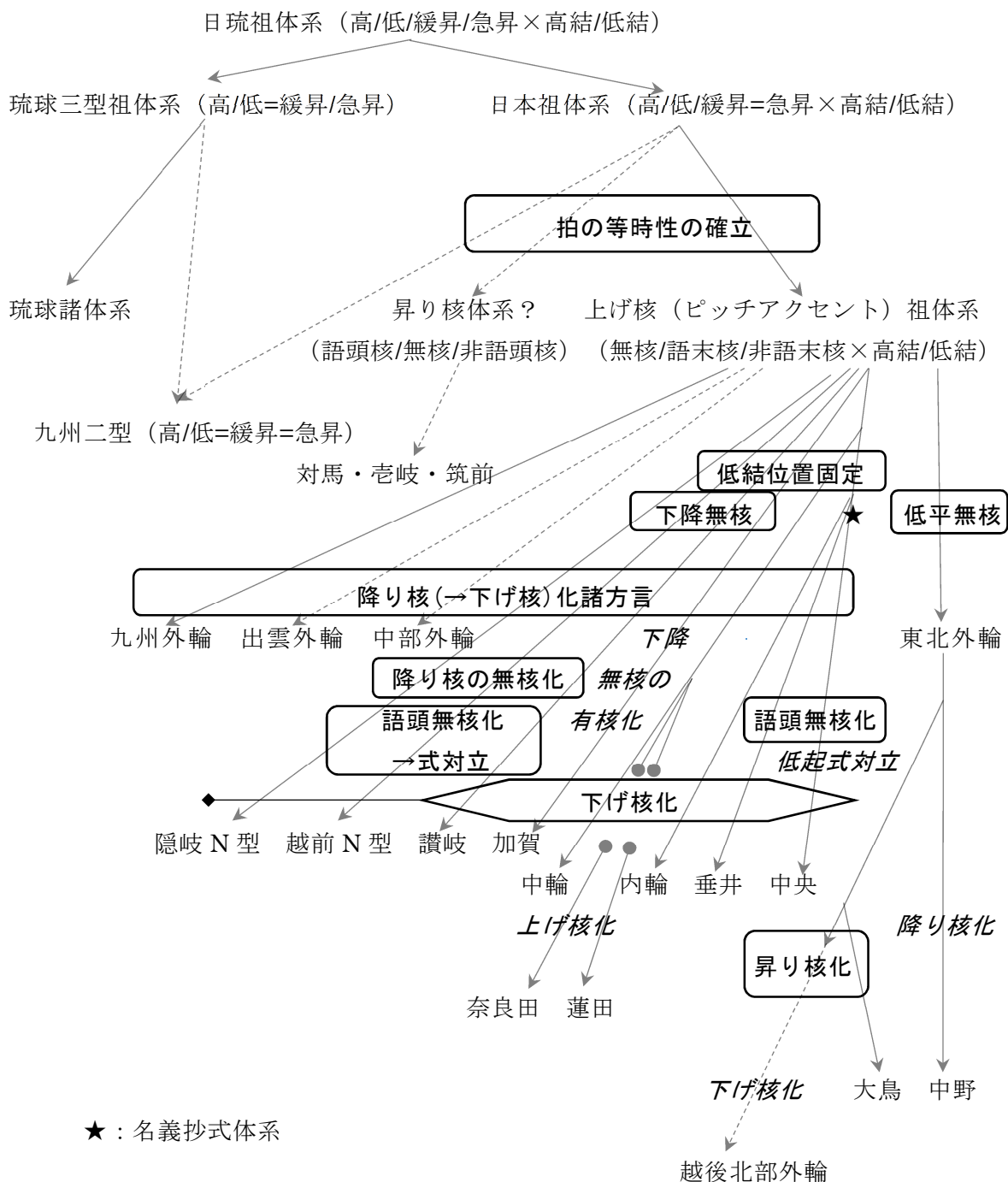
昇り核と下げ核、降り核と上げ核の間のこのような関係はおそらく双方向的であるので、どちらの方向の変化だったかの判断には、方言地理学的な分析を要する。中野方言や、さらにおそらく西日本の諸方言で降り核化が起きる前の段階での上げ核体系は、おそらく(65)a のタイプであったと考えられる。これに対して、大鳥方言に隣接する地域では、上げ核体系がいったん(65)b のタイプになってから(65)c を経て(65)d のタイプの昇り核体系になった、とみることができる。この体系からさらに、アクセント核以降の下降側が弁別的(「下降を開始する」)に変化した体系は、下げ核体系になると予想される。したがって、外輪式の下げ核体系の先行段階は、このような昇り核からの漸進的变化と反転でも説明できる。もうひとつの可能性は、降り核体系を先行段階とする漸進的变化で、この場合は(65)d から(65)a に向かった変化である。

以上、同じ音声的实现をもつ体系の弁別特徴の変更のみによってピッチアクセント(有核型)の変化を説明することを試みた。児玉(2017)で主として論じたアクセント核の消失や発生の変化も、降り核化した有核型が無核型と実現形に重なりをもつようになった場合に想定される変化である。

参考文献

- 木部暢子(2008)「内的変化による方言の誕生」『シリーズ方言学 1 方言の形成』43-81. 東京: 岩波書店.
- 金田一春彦(1959)「東北地方方言の特徴」日本放送協会編(1999a) 15-22.
- 児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』16.1-34.
- 日本放送協会編(1999a) 『CD-ROM 版 全国方言資料』第1巻東北・北海道編.
- 日本放送協会編(1999b) 『CD-ROM 版 全国方言資料』第7巻辺地・離島編 I.
- 柴田武(1953)「山形県大鳥方言の音素分析」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』415-442. 東京:三省堂.
- 柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『国語学』21.44-69.
- 柴田武(1967)「辺地・離島(I)の方言の特徴」日本放送協会編(1999b) 15-28.
- 柴田武(1988)『方言論』東京:平凡社.
- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別的特徴」『言語の科学』6. 23-65.

補図：児玉(2017)に基づくアクセント系統史



[解説]

上図は、児玉(2017)と本稿で想定しているアクセント変化を図示したものである。通説とのもっとも大きな違いは、アクセント変化をすべて系統分岐に結びつけることはしない、という点である。方言の系統分岐自体は、日本列島のどこかで日本語が話されるようになれば、そこで直ちに開始されたはずだと考える。アクセントの分岐を、すでに分化をはじ

めた後の諸方言がそれぞれどんな弁別解釈の変更を経たかにより説明し、このような変化の一部は波状的に地理的分布を広げることもあったと考える。特に、枠で囲った変化は複数の方言で繰り返された変化であると見て、この変化を経た方言への線が枠を通るように作図した。以下では、このような変化について説明する。

<拍の等時性の確立>

曲調と平調の弁別を失わせピッチ変異の位置対立のみが弁別的となるような変化である。

<低結位置固定>

ピッチアクセント以前の体系にあった、(特定の環境でのみ発現する)境界下降の有無による対立のうち、下降有の型のすべてまたは一部で下降位置が固定し、その後の降り核化に伴って核として弁別されうるようになる変化。この変化を経なかったピッチアクセント体系が「外輪式」であり、これらの体系やピッチアクセント化を経ていない体系では個別に高結式と低結式の対立を失ったと考えるが、この後者の変化については図から省略する。

<下降無核／低平無核>

無核型は有核型との対立が維持できるような音形であれば、方言ごとにさまざまに変異しえたはずである。上げ核体系で、それぞれ下降調・低平調の無核型となったと想定される変化である。

<降り核化／昇り核化>

上げ核体系の弁別特徴の解釈変更。系統を越えて波状的に広がりえたと考える。

<語頭無核化／降り核の無核化>

降り核化に伴い、有核型が無核型となる変化。語頭核の実現は先行文節のピッチ変位となるため、先行文節がない場合に平調無核となりやすい。無核型が下降無核であれば、語中降り核が無核型と合流しうる。(逆に、下降無核が有核に合流するのが「有核化」)

<下げ核化>

降り核体系(や昇り核体系)が漸進的にピッチ変位の位置を変える変化。このうち、中央式などの体系の下げ核化は、核の一拍前ずれを伴うものである。また、本州N型は、このような前ずれによる語頭下げ核型が2種類の無核型と対立する体系となり、位置対立を失って「式」に変質した、と考える。讃岐式では低結式由来の下げ核がある。

<未詳・非表示>

点線で示した部分と一型化(多くは語声調あるいは式の弁別喪失で説明できると考える)。